

臨濟義玄平生事跡考辨

賈 晋華 (翻訳・談仁)

臨濟義玄(？～八六六)の史伝について、現在最も重要な成果は依然として柳田聖山氏が一九五〇年代から一九七〇年代にかけてなされた研究である⁽¹⁾。小稿は柳田氏及び関連学者の研究をもとに、あえて伝世資料に存する臨濟の伝記史料を考証し、确实と見られる早期資料と後代に創作された附加内容を明確に区別し、更に禪文献以外の碑銘や史料も参考にして、臨濟の行状についての史実をできる限り明らかにし、学术界及び仏門のために、确实なる伝記記述を呈示しようとするものである。

一、伝世の臨濟語録における伝記資料、及びその他の関連文献

後世に伝わる『鎮州臨濟慧照禪師語録』は、臨濟の弟子、三聖慧然が記録したものと記すが、実際のところ、円覚宗演が宋徽宗宣和二年(一一二〇)に編刻したものである。臨濟語録は種々の増補や修訂を経ており、その発展過程も、これまで諸氏によって論じられてきた⁽²⁾。本節は主として、種々の臨濟語録に含まれた伝記資料を比較対照することで、その変遷過程を整理することを目標とする。

隨藏主編集と署する『古尊宿語録』の第四、五巻において、臨濟義玄と弟子興化存獎の語録が存し、巻

末の「臨濟慧照禪師塔記」は保寿延沼が撰したと称する⁽³⁾。宇井伯寿氏と柳田氏は、蹟蔵主が守蹟僧挺であるとし、柳田氏はさらに守蹟がおよそ宋高宗紹興元年から八年(一一三一～一一三八)の間に、『古尊宿語要』二十家を出版し、その後覺心居士によつて宋度宗咸淳三年(一二六七)に『古尊宿語録』として重版され、臨濟等の八家の語録も補入されたと考証した⁽⁴⁾。ゆえに、多くの研究者は「臨濟慧照禪師塔記」を信頼性の高い根本史料と見る傾向があり、それに基づいて臨濟の史伝を述べることが多い。然るに、一二六七年に現れたその「塔記」には標題・内容ともに問題があり、この点は臨濟語録における伝記資料と比較対照しても明らかである。

そもそも臨濟語録は、南唐中宗保大十年(九五二)に釈静・釈筠によつて編集された『祖堂集』に初めて現れたのである。編者の叙述によると、それは当時世に伝わる『臨濟』別録』に基づいたものであり、臨濟の史伝に関する記述は以下のとおりである。

臨濟和尚嗣黄檗、在鎮州。師諱義玄、姓邢、曹南人也。……侍奉大愚、經十余年。……咸通七年丙戌歲四月十日示化。諡号慧照大師、澄虛之塔⁽⁵⁾。

このように『祖堂集』はごく簡略に臨濟の基本情報、即ち法名、俗名、本籍、師承、弘法の地、示寂時期、諡号塔号などを述べている。

つぎに、延寿(九〇四～九七五)が周世宗顯徳元年から宋太祖開宝八年(九五四～九七五)までに編集した『宗鏡録』は、臨濟の語録を一則記録したが、彼の史伝については語っていない⁽⁶⁾。また、道原は宋真宗景德元年(一〇〇四)に『景德伝灯録』を著し、臨濟の史伝について、

鎮州臨濟義玄禪師、曹州南華人也、姓邢氏。幼負出塵之志、及落髮進具、便慕禪宗。初在黃檗隨衆參侍。……師後還鄉党。俯徇趙人之請、住子城南臨濟禪苑、学侶奔湊。……師唐咸通七年丙(戊)〔戊〕四月十日、将示滅、乃説伝法偈曰、……。偈畢坐逝。勅諡慧照大師、塔曰澄靈⁽⁷⁾。

と述べるが、前掲『祖堂集』の記述内容とほぼ同じである。両文献の記した機縁対話、例えば黄檗と大愚が棒拳で臨濟を悟りに導いた内容(次節参照)は、必ずしも史実とは言えず、両文献に見られる行状は當時世に伝わる『臨濟別録』に基づいた可能性が高く、恐らく事実であろうと思われる。

ほかにも、『伝灯録』第二十八巻諸方広語に臨濟の上堂語が残され、それも当時伝世の『臨濟広語』によったものと考えられるが、臨濟の史伝については言及していない⁽⁸⁾。『広語』は『宗鏡録』の所載内容と著しく似ているので、恐らく延寿が基づいたのは『臨濟広語』であろう。

李遵勗(九八八―一〇三八)は宋仁宗天聖七年(一〇二九)に『天聖広灯録』を編集し⁽⁹⁾、黄龍慧南(一〇〇二―一〇六九)は天聖七年から宋神宗熙寧二年(一〇二九―一〇六九)までの間に『馬祖四家録』を編集した⁽¹⁰⁾。両文献に収められる臨濟語録は内容から順序までほぼ同じで、わずかな相違しかなかった⁽¹¹⁾。故に、後者は前者を踏襲したものと考えられよう。また、両文献は共に機縁対話を多く増やし、特に臨濟が各地を歴参した機語が多数見られる。これらの歴参物語や対話は『祖堂集』、『宗鏡録』及び『伝灯録』に見えず、一〇〇四年から一〇二九年の間に増補・作成されたと考えられる。

北宋に入り、臨濟系は益々盛んになっていった。『広灯録』の編集者である李遵勗本人もその化を受けて法系的主張が強く、それを編纂したのは臨濟系を禪宗の正統にまでもちあげる狙いでもあったろう。『広灯録』所載の語録は臨濟系の禪師を主とし、李遵勗本人も臨濟七伝の弟子として入れられた。従って、

本系祖師の地位を築き上げるには、臨濟語録の内容を増補・拡充することは最大の急務となつたのである¹²⁾。両文獻には信賴性の低い歴參物語以外、臨濟の史伝に関する内容はなかつた。

円覚宗演は一一二〇年に『鎮州臨濟慧照禪師語録』(以下『臨濟録』と略する)を編纂し、所収の臨濟語録は数量・内容ともに『広灯録』や『四家録』と大差はない¹³⁾。よつて、宗演は主にその二書を踏襲しただけで、標題どおりに臨濟弟子三聖慧然編というわけではなかつたと推測される。また、『臨濟録』の特色は、臨濟の弟子を編集者として付け加えた以外に、語録の前後順序を変更した上、上堂、示衆、勘辨、行録の四章に分けている¹⁴⁾。そして、終章に保寿延沼撰という臨濟伝記も付加した。かかる分節や標題は宋代語録の一般形式であるゆえ、柳田氏も Paul Demiéville 氏もその分節は宗演によるものであると推測している¹⁵⁾。

『臨濟録』の終りにある臨濟伝記の全文は以下のようである。

師諱義玄、曹州南華人也、俗姓邢氏。幼而穎異、長以孝聞。及落髮受具、居於講肆、精究毘尼、博蹟經論。俄而嘆曰、此濟世之医方也、非教外別伝之旨。即更衣游方、首參黄蘗、次謁大愚。其機縁語句載于『行録』。既受黄蘗印可、尋抵河北鎮州城東南隅、臨滹沱河側小院住持。其臨濟因地得名。時普化先在彼、佯狂混衆、聖凡莫測。師至即佐之。師正旺化、普化全身脱去、乃符仰山小釈迦之懸記也。適丁兵革、師即棄去。太尉默君和於城中捨宅為寺、亦以臨濟為額、迎師居焉。後弘衣南邁至河府、府主王常侍延以師礼。住未幾、即來大名府興化寺、居于東堂。師無疾、忽一日撰衣拋坐、与三聖問答畢、寂然而逝、時唐咸通八年丁亥孟陞月十日也。門人以師全身、建塔于大名府西北隅。勅諡慧照禪師、塔号澄靈。合掌稽首、記師大略。住鎮州保寿嗣法小師延沼謹書。¹⁶⁾

伝末に作者と署された保寿延沼については、『祖堂集』や『伝灯録』に見える臨済の直伝弟子宝寿沼であると見る学者と¹⁷⁾、あるいは臨済の四伝弟子、風穴延沼(八九六〜九七三)であると見る学者がいる¹⁸⁾。だがいずれにしても、一一二〇年に突如として現れたその伝記は疑わしいものと言わざるを得ず、むしろ宗演が種々の資料を総合した上で創作したものではないかと見られる。特に臨済が普化に接した記録は、当時の古い臨済語録のいずれにも存せず、『宋高僧伝』普化伝や『伝灯録』普化章によるものであった¹⁹⁾。また、黙君和についても、『太平広記』所引の『劉氏耳目記』、『旧五代史』及び『資治通鑑』所載によると、黙君和は墨君和の誤りである。成徳節度使王鎔が唐僖宗中和三年(八八三)に節度使となった時、墨君和は十五、六歳で、ゆえにおよそ咸通九〜十年(八六八〜八六九)生まれと推測できる。墨君和は始め屠殺業者で、唐昭宗景福二年(八九三)に王鎔を救出した功績で官位を賜った²⁰⁾。墨君和が生まれた時、臨済はすでに示寂し、彼が功を立て官位を賜ったのは更に臨済死後二十数年以上のことになる。従って、墨君和が宅を捨てて寺と為すことで臨済を迎えたのも明らかに後世の創作であろう²¹⁾。ほかにも、臨済を蒲州(河中府)に招いたのは蔣伸(次節を参照)で、上のように、「王常侍」ではなかった。最後に、比較的早い時期の資料、例えば『祖堂集』、『宋高僧伝』及び『伝灯録』では、臨済が咸通七年四月十日(西暦八六六年五月二十七日)卒とあるのに対して、咸通八年(八六七)正月(孟陬月)十日となっており、恐らく改竄であろう。しかも、孟陬月は恐らく孟陽月の誤りで、四月は孟陽とも呼ばれた²²⁾。こうして見れば、ここは七年を八年に改めて、日付をそのままにしたと推測される。

最後に、一二六七年に刊行された『古尊宿語録』に、その史伝は全文写され、「臨済慧照禪師塔記」という標題も付け加えられた。柳田氏と入矢氏が指摘したように、その標題はあきらかに編集者によって付加されたもので、本物の塔記と見なされない²³⁾。その上、『古尊宿語録』所載の臨済語録は、内容から

順序、分節まで宗演編の『鎮州臨濟慧照禪師語録』と一致しているので、それを踏襲したとほぼ断言できる。また、終りの「住大名府興化嗣法小師存獎校勘」という一句も以前の記述に見られず、興化存獎(八三〇～八八八)は臨濟の直伝弟子ということから、これも編集者が付け加えたものであろう²⁵⁾。

上記の分析から、伝世禪文献に存する臨濟の史伝は、『祖堂集』や『伝灯録』の所載は五代末葉、北宋初期に伝わる『臨濟』別録』によるもので、比較的信頼性が高いものと窺え、その他は明らかに問題点を抱えており、慎重に弁別しなければならない。

禪文献以外の仏教典籍として、『宋高僧伝』臨濟伝の内容は最も古いものとして信用できる。

釈義玄、俗姓邢、曹州南華人也。参学諸方、不憚艱苦。因見黄蘗山運禪師、嗚喙同時、了然通徹。乃北帰郷土、俯徇趙人之請、住于城南臨濟焉。罷唱経論之徒、皆親堂室。示人心要、頗与徳山相類。以咸通七年丙戌歳四月十日示滅。敕諡慧照大師、塔号澄虚。『言教』頗行於世、今恒陽号臨濟禪宗焉²⁶⁾。

この伝の所載はほぼ『祖堂集』や『伝灯録』に一致しており、当時の『臨濟別録』に基づいたものであろう。

ちなみに、仏教典籍以外にも、臨濟の史伝を考察するに貴重な原始史料——唐代文士公乘億の撰した「魏州故禪大徳獎公塔碑」がある。獎公とは臨濟の弟子興化存獎のことである。碑文は特に臨濟の史伝に關して、

(存獎) 遽聞臨濟大師已受蒲相蔣公之請。纔凝省侍、飛錫而遽及中条。尋獲参随、置杯而將渡白馬。

当道先太尉中令何公専発使人、迎請臨濟大師。和尚翼從一行、不信宿而至於府下、而乃止於觀音寺江西禪院。而得簪裾繼踵、道俗連肩。曾未期年、是至遷化^初。

と述べている。柳田氏は早くも一九五〇年代にこの碑文に注意した。氏の研究者としての並外れた資料の搜索と運用能力に感心せざるを得ないが、『臨濟録』の機縁対話を過信した点がいささか残念である。また、後世の伝記資料がある程度使用したことは、彼の考証の結果に影響を及ぼしており、再検討する余地をも残している。実際柳田氏自身も、「我々はこの大師の生涯を築き上げることも、あくまでも試みの段階で、なぜなら伝統に基づく資料は、正確なる歴史的事実には立脚できないからである」と述べている⁸⁸。次節ではこのように事実と疎なる後世の資料を使用せずに、信頼性の高い関連史料も加えて、臨濟の行状について精確なる考証を行ってみたい。

二、臨濟義玄の史伝

前節に続き、ここでは『祖堂集』、『宋高僧伝』、『伝灯録』及び公乘億「魏州故禪大德癸公塔碑」所載の伝記資料を参考にし、それ以外の碑文や関連資料をも合わせて、臨濟の史伝を明らかにしてみようと思う。

まず、三書の一致した記述は以下のようなものであろう。臨濟は俗姓邢、曹州南華（今山東東明）の人である。柳田氏は臨濟が唐憲宗元和年中（八〇六―八二〇）の生まれだと推測したが⁸⁹、直接の証拠を示さなかった。『伝灯録』には「幼負出塵之志」とあるが、それは高僧史伝の慣例で、必ずしも臨濟が幼年に出家したということではない。『宋高僧伝』には臨濟が出家後、「參学諸方、不憚艱苦」と見えて、これ

については傍証がないが、贊寧の記述は素朴で、しかも唐代に禅僧は出家後、諸方参学の経歴が普通であるゆえに、当時世に伝わった『別録』に基づいたと考えられ、恐らく事実であろう。

また、三書ともに臨済が黄檗山で黄檗希運に師事したことを記載している。『伝灯録』には更に彼が具足戒を受けたのは二十歳以降であったと見える。裴休(七九一〜八六四)は『伝心法要』の序において、「有大禅师、法諱希運、住洪州高安县黄檗山鷲峯下。……余会昌二年廉於鍾陵、自山迎至州、憩龍興寺、旦夕問道」⁸⁰と述べている。裴休は唐武宗会昌元年から三年まで(八四一〜八四三)江西觀察使を担当した⁸¹。江西省の府治は洪州南昌県で、唐に入って鍾陵県と改名した⁸²。もし序の記録どおりに、裴休が会昌二年(八四二)に希運を黄檗山から府治に向かわせたならば、希運が黄檗山に居たのは会昌元年(八四二)以前のことになる。仮に臨済が八四一年に二十歳であったとすると、逆算すればおよそ唐穆宗長慶二年(八二二)生まれになる。無論臨済が黄檗山に長年滞在したことも考えられるため、彼の生年はやや数年早く、柳田氏の推測通りに、元和中になる可能性もある。こうして見ると、臨済が黄檗に師事したのは、およそ唐文宗朝(八二六〜八四〇)から武宗会昌初年までの間になるであろう。

臨済が黄檗と大愚のもとで、棒拳で大悟したという有名な公案について、『祖堂集』には臨済義玄は黄檗希運の指示に従って高安大愚の会下に参じ、二度打たれて大悟し、大愚に築拳したと見える⁸³。一方、『伝灯録』には、臨済が黄檗に祖師西来意をただしたが、三度問うて三度棒を喫し、師の指示のもと大愚の会下に参じ、後者は黄檗老婆心の語で諭されて、臨済が礼として大愚を一発築拳したとある⁸⁴。しかしながら、黄檗『伝心法要』は智語問答を数条含みながらも、殆どは一般の問答に過ぎず、黄檗の時に棒打の機鋒どころか、成熟した機縁問答すら現れていない。『伝灯録』では大愚を帰宗智常の法嗣としているが、名目があるだけで内容がなく、注に「無機縁語句不録」と記している⁸⁵。大愚には伝世の機語の

ないことが知られる。臨済が大悟した物語における黄檗、大愚棒拳交施の機鋒は、唐末五代に創作された話であろうと思われる。『祖堂集』所載の臨済が大愚に対して『瑜伽論』や唯識經典を講論し、さらに悟つてからの十数年、大愚に師事したことも、恐らく事実ではない。『宋高僧伝』は臨済が黄檗に師事したことをみを記録し、大愚の名に触れていないのは、贊寧自身も棒打の伝説を受け入れなかったためであろう。

『宋高僧伝』、『伝灯録』二書は、臨済が黄檗と別れてから、北へ山東の曹州の実家まで帰り、その後、『俯循趙人之請、住於「鎮州」城南臨済(禪苑)』と見える。『祖堂集』もまた「在鎮州」としている。柳田氏は「趙人」を単数の「ある趙人」と読み取り、後世臨済語録の聴法者である「府主王常侍」から、この「趙人」は成徳軍節度使、鎮州長吏王紹懿(？)八六六)であると推測した⁸⁶⁾。しかし、中国の古典では「趙人」等の単語は通常複数として使われ、「趙の地の民衆」という意味に過ぎない。また、すでに考察したように、『伝灯録』臨済語録の後に見える聴法者や対話者などは、後世による創作の可能性が高い。故に『宋高僧伝』と『伝灯録』の記録に基づき、臨済が師匠の黄檗から離れた後、一旦山東曹州の実家に戻り、その後趙地(鎮州の地は戦国時代に趙国に属した)の民衆の要請により、鎮州府治真定県(今河北正定)東南の臨済禪院に住した。具体的な時間は考証しがたいが、上述の黄檗に師事した期間によれば、彼の帰郷は会昌五、六年(八四五～八四六)の間の武宗破仏の時、鎮州臨済禪院に招かれたのは宣宗大中初年(八四七)、仏教復興の時と見られる。

『宋高僧伝』普化伝には臨済と普化が機鋒を交わしたことが見え、『伝灯録』普化章には二人の間に行われた機縁語も多くある⁸⁸⁾。だが、『祖堂集』臨済章、『宋高僧伝』臨済伝及び『伝灯録』臨済章、みな普化に触れず、それらの機縁の物語は必ずしも事実ではないことがわかる。ただし、普化は宣宗大中(八四

七〇八五九)の間に鎮州におり、およそ唐懿宗咸通初(八六〇)のころに示寂したので⁹³⁾、二人の間に交際がなかったわけでもない。

『祖堂集』、『宋高僧伝』及び『伝灯録』は臨濟が臨濟禪院に移住した後のことを一切記録していないので、公乘億「魏州故禪大德獎公塔碑」及び他の碑文、資料によって補充説明をしておく。「獎公塔碑」によると、興化存獎は咸通元年(八六〇)に臨濟に師事して悟り、しばらく経って師を離れて各地を歴参し、まず長安に向かい、後に南の呉地に下り、江西洪州まで足を運んだ、とある。「過鍾陵、伏遇仰山大師方開法宇、大啓禪局」とある。仰山は仰山慧寂(八〇七〜八八三)のことで、江西觀察使韋宙が大中十二年から咸通二年(八五八〜八六二)まで江西に駐在し⁹⁴⁾、咸通二年に父韋丹の洪州南昌(鍾陵)県に所在する石亭を觀音院に変え、仰山に要請して起したのである⁹⁵⁾。このことは陸希声の記述にも裏づけられる。陸希声撰「仰山通智大師塔銘」には、「希声頃因從事嶺南、遇仰山大師於洪州石亭觀音院、洗心求道、言下契悟玄旨。大師嘗論門人、以希声為称首」とある⁹⁶⁾。陸希声は咸通元年(八六〇)に商州刺史鄭愚の属僚として出仕し⁹⁷⁾、また、鄭愚は咸通二年から三年(八六一〜八六二)までは桂管觀察使で、咸通三年から四年(八六二〜八六三)は嶺南西道觀察使であった⁹⁸⁾。このことから、陸希声が桂管・嶺西で鄭愚に付いたのは咸通二年から四年までの間となる。桂管・嶺西両方とも嶺南と呼ばれ、碑文によれば、陸希声が咸通二年に初めて嶺南に勤めた時、洪州觀音院經由で、仰山を訪ねたのである。この件は当時仰山が觀音院にいた証拠になる。興化が洪州を訪ねたのは、仰山が觀音院を起したばかりの頃であったので、確実に八六一年のことだと知られる。

「獎公塔碑」は、続いて、ちようど八六一年に興化が仰山を訪ねた頃、「邊聞臨濟大師已受蒲相蔣公之請。纒凝省侍、飛錫而遽及中条」とある。蒲相蔣公は蔣伸で、彼は咸通二年から四年(八六一〜八六三)ま

で河中節度使を勤め、治所は河中府(蒲州)河東県(今山西永濟)であり、中条山は蒲州の境界にある。⁽⁴⁶⁾ 興化は臨濟が蔣伸の請に招かれたと聞くや、洪州を離れて北へ向かい、中条山で臨濟と合流し、その後臨濟に奉事し共に蒲州治所に赴いたのである。こうして見れば、臨濟が河中節度使の請に応え、鎮州を離れて蒲州にある寺を起したのは確実に咸通二年(八六二)のことであった。

「奘公塔碑」はさらに、「尋獲參隨、置杯而將渡白馬。当道先太尉中令何公、專發使人、迎請臨濟大師。和尚翼從一行、不信宿而至於府下、而乃止於觀音寺江西禪院。而得簪裾繼踵、道俗連肩。曾未期年、是至遷化」と見える。「白馬」は白馬の渡し場で、滑州白馬県(今河南滑県)の黄河の川岸にあり、蒲州と魏州の境にある。⁽⁴⁸⁾ 「先太尉何公」は何弘敬(八〇六〜八六五)で、彼は唐文宗開成五年から懿宗咸通七年(八四〇〜八六六)まで魏博節度使を勤め、咸通七年三月に檢校太尉兼中書令に任命され、同月死没したのである。⁽⁴⁹⁾ 魏博節度使の治所は魏州貴郷県(今河北大名)にある。「期年」とは一周年のことである。即ち、臨濟は魏州江西禪院に住すること一年未滿で遷化したのである。臨濟が示寂したのは咸通七年(八六六)四月十日であるゆえ、何弘敬の請によつて蒲州を離れ魏州に赴いたのは、咸通六年(八六五)の夏秋の交にならう。碑文は最後に、臨濟が示寂した後、「斯蓋和尚服勤道至、展敬情深、無乖靈塔之儀、克尽茶毗之礼云」と見える。「塔」とはstupaの音訳「卒堵波」の省略で、所謂塔のことである。そこから興化は師の葬儀を主事し、塔を建て、恭敬を尽したことが窺える。「奘公塔碑」には更に、興化が示寂した後、「遂建塔於府南貴郷薫風里、附於先師之塔、志也」とある。「先師」とは臨濟のことで、臨濟と興化の塔は共に魏州貴郷薫風里に建てられたことになる。⁽⁵⁰⁾

『祖堂集』、『宋高僧伝』及び『伝灯録』は共に、唐懿宗が臨濟に「慧照大師」の諡を賜ったことを記している。前掲の二書に、懿宗から賜った塔号は「澄虚」であり、後者は「澄靈」とあるが、恐らく前二書

の記述通りであろう。何弘敬は臨濟より一月早く逝去し、子の何全暉（八三九～八七〇）が魏博節度使を受け継いだので⁶¹、懿宗に諡を奏請したのは何全暉になる。『宋高僧伝』に、「言教」頗行於世、今恒陽号臨濟禪宗焉」とあるため、遅くとも五代末か北宋の始め頃、『臨濟言教』は既に世に伝わり、「臨濟禪宗」という呼称も当時使われていたと見られよう。

以上を総括して言えば、臨濟の行状はつぎのようになる。臨濟は俗姓邢、法名は義玄である。山東曹州南華県の人で、唐憲宗元和中（八〇六～八二〇）に生まれた。若き頃出家し、各地を歴参したが、二十歳に具足戒を受け、その直後に江西洪州黄檗山へ行つて黄檗に師事した。その時期はほぼ唐文宗朝から武宗会昌の始め頃にあたりと見られる。会昌五、六年（八四五～八四六）武宗破仏の間に山東曹州に帰省し、宣宗大中の始め頃鎮州の民衆の要請によつて、府治真定にある臨濟禪院を起した。懿宗咸通二年（八六一）に、河中節度使蔣伸の請によつて、鎮州から蒲州に赴き、ある寺院を起した。咸通六年（八六五）の夏秋の交、臨濟は魏博節度使の請によつて、蒲州を離れて魏州に赴き、観音寺江西禪院を起した。咸通七年（八六六）の四月十日（西曆八六六年五月二十七日）臨濟は示寂し、弟子の興化が葬儀を主持し、魏州貴郷県薰風里に塔を建てたのである。魏博節度使何全暉が唐懿宗に奏請し、諡号「慧照大師」塔号「澄虚」を賜った。遅くとも五代の末か北宋の始め頃、『臨濟言教』『臨濟別録』『臨濟広語』が世に伝わり、当時「臨濟禪宗」という称号もすでに行われたと考えられよう。

【注】

- (1)横井（柳田）聖山「興化存養の史伝とその語録―中国臨濟禪創草時代に関する文献資料の総合整理、覚書その一」（『禅学研究』四八、一九五八年、五四―九二頁）、柳田聖山「臨濟栽松の話と風穴延沼の出生―中国臨濟禪創草時代

に関する文献資料の総合整理、覚書その三(『禅学研究』五一、一九六一年、四五―五八頁)、柳田聖山「臨済ノ一ト」(東京 春秋社、一九七二年)‘Yanagida Seizan, “The life of Lin-chi I-hsuan”, *The Eastern Buddhist: New Series* 2 (1972:70-94)。その英語の論文は発表された際に、もとの注が多く編集者によって圧縮された。後に全文及び注を全部含めて、柳田氏の“Historical Introduction to ‘The Record of Linji’”, in *The Record of Linji*, trans. Ruth F. Sasaki, ed. Thomas Y. Kirchner (1975; rpt., Honolulu: University of Hawaii Press, 2009, 59-115)に収録された。小稿では後者を使用した。

(2) 例えば、柳田聖山「語録の歴史 禅文献の成立史的研究」(『禅文献の研究 上』京都・法蔵館、二〇〇一年)、『柳田聖山集』第二卷(三七五―三九六頁)、沖本克己「臨済録における虚構と真実」(『禅学研究』七三、一九九五年、一七―四九頁)‘Albert Welter, *The Linji lu and the Creation of Chan orthodoxy: The Development of Chan’s Records of Sayings Literature* (New York: Oxford University Press, 2008, 81-163)があげられる。

(3) 蹟蔵主編、蕭蓮父・呂有祥・蔡兆華点校『古尊宿語録』(北京・中華書局、一九九四年、第五卷、八七頁)

(4) 宇井伯寿『第二禅宗史研究』(東京・岩波書店、一九六六年、四八〇―四八一頁)‘Yanagida Seizan, “Historical Introduction”, 86’ 柳田聖山「古尊宿語録考」(『古尊宿語要』京都・中文出版社、一九七三年、二八一―三二八頁)

(5) 静、筠編、孫昌武・衣川賢次・西口芳男点校『祖堂集』(北京・中華書局、二〇〇七年、八五四―八五七頁)

(6) 延寿編『宗鏡録』(『大正蔵』本、第四八冊、第九八卷、九四三c)

(7) 道原編『景德伝灯録』(『大正蔵』本、第五一冊、第一二卷、二九〇a―二九一a)

(8) 『伝灯録』第二八卷(『大正蔵』本、四四六c―四四七a)

(9) 李遵勗『天聖広灯録』(『統蔵経』本、第七八冊、第一一卷、四六八a―四七四c)

(10) 柳田聖山編『四家語録・五家語録』(京都・中文出版社、一九八三年)には日本慶安元年(一六四八)刊の明万曆

- 三十五年(一六〇七)の『四家語録』複製本を収録している。だが、現在南京図書館所蔵の『四家録』のほうが宋元刊本の原貌を保存していると考えられる(賈晋華『古典禪研究』香港・牛津大学出版社、二〇一〇年、一一一―一〇三頁)。
- (11) Albert Welter, *Linji Lu*, 111, 189, note 8.
- (12) Albert Welter, *Linji Lu*, 112-117.
- (13) Albert氏は『広灯録』と『臨濟録』に関して比較対照をして表にしている。*Linji lu*を参照(127-130)。
- (14) 「上堂」と「示衆」の二節は明確に標題をあげていないが、劈頭の部分から明らかである。Albert Welter, *Linji Lu*, 117, 112, 191-192 note 45)を参考。
- (15) 柳田聖山『臨濟録』(東京・大蔵出版、一九七八年、一六頁)、『Paul Demiéville, *Les entretiens de Lin-tsi* (Paris: Fayard, 1972, 12)°。
- (16) 宗演編『鎮州臨濟慧照禪師語録』(『大正藏』本、第四七冊、五〇六c)
- (17) 『祖堂集』第二〇卷(八九二頁)、『伝灯録』第二二卷(二九四c)、柳田聖山「臨濟栽松の話と風穴延沼の出生」(五三三頁)、『Yanagida Seizan, "Historical Introduction": 101, note 37.
- (18) 入矢義高『臨濟録』(東京・岩波書店、一九九一年、二二五頁、注二)、『Albert Welter, *Linji lu*, 123.
- (19) 贊寧(九一九〜一〇〇一)『宋高僧伝』第二〇卷(北京・中華書局、一九八七年、五一〇―五一二頁)、『伝灯録』第一〇卷(二八〇b)
- (20) 李昉(九二五〜九九六)等編『太平広記』第一九二卷(北京・中華書局、一九六二年、一四四二―一四四三頁)、『薛居正(九一二〜九八一)等『旧五代史』第五四卷(北京・中華書局、一九七五年、七二六―七二七頁)、『司馬光(一〇一九〜一〇八六)『資治通鑑』第二五九卷(北京・中華書局、一九七二年、八四四三頁)』

- (21) 柳田聖山「臨濟栽松の話と風穴延沼の出生」(五三頁)。柳田氏は同時に、大名府という呼称が最初に現れたのは五代後漢乾祐元年(九四八)で、晩唐にはなかったと指摘した。しかし、中唐に魏博節度使田悅(七五一〜七八四)は建中三年(七八二)に魏王と自称し、魏州を大名府と改名した。唐王朝には認められなかったにしても、魏州は古代から大名という名があり、晩唐に大名府と呼ばれたことも不思議ではない。劉昫(八八八〜九四七)等編『旧唐書』第一四二卷(北京・中華書局、一九七五年、三八四五頁)、歐陽修(一〇〇七〜一〇七二)『新唐書』第二二〇卷(北京・中華書局、一九七五年、五九三〇頁)
- (22) 『樂府詩集』の「横吹曲辞五、瑯琊王歌辞」に「孟陽三四月、移鋪就陰涼」と見える。郭茂倩『樂府詩集』第二五卷(北京・中華書局、一九七九年、三六三〜三六四頁)。
- (23) 柳田聖山「臨濟栽松の話と風穴延沼の出生」(五三一〜五四頁)、入矢義高『臨濟録』(二五頁、注二)
- (24) 『古尊宿語録』第五卷(八七頁)
- (25) 柳田聖山「臨濟栽松の話と風穴延沼の出生」(五三一〜五四頁)
- (26) 『宋高僧伝』第二二卷(二七七頁)
- (27) 公乘億「魏州故禪大德癸公塔銘」。李昉(九二五〜九九六)等編『文苑英華』第八六八卷(『四部叢刊』本、九a、一一a)、董誥(一七四〇〜一八一八)等編『全唐文』第八二三卷(一八一四年、重版北京・中華書局、一九八三年、一九a頁)
- (28) Yanagida Seizan, "Historical Introduction", 65.
- (29) Yanagida Seizan, "Historical Introduction", 65-66.
- (30) 裴休「黄檗山断際禪師伝心法要序」(『黄檗山断際禪師伝心法要』〔大正藏〕本)
- (31) 郁賢皓『唐刺史考全編』第一五七卷(合肥・安徽大学出版社、二〇〇〇年、二二六三頁)

- (32) 李吉甫(七五八〜八一四)『元和郡縣圖志』第二八卷(北京・中華書局、一九八三年、六六九〜六七〇頁)
- (33) 『祖堂集』第一九卷(八五五〜八五六頁)
- (34) 『伝灯録』第一二卷(二九〇a-b)
- (35) 『伝灯録』第一〇卷(二七四a)
- (36) Yanagida, "Historical Introduction", 69-71.
- (37) 『宋高僧伝』第二〇卷(五一〇〜五一二頁)
- (38) 『伝灯録』第一〇卷(二八〇b-c)
- (39) 同前(二八〇c頁)。陳垣『釈氏疑年録』第五卷(北京・中華書局、一九六四年、一五四頁)
- (40) 『爰公塔碑』には、「而後大中九年、再遇侍中張公、重起戒壇於涿郡。衆請和尚、以六踰星紀、三統講筵」と見える。興化が大中九年(八五五)に涿州に招かれ、戒壇と講席を六年主事したのは、遅くとも咸通元年のことになる。柳田氏はその張公を盧龍節度使張允伸と正しく推測していた(「興化存獎の史伝とその語録」六〇頁)、『Historical Introduction', 101 note 38)。
- (41) 『唐刺史考全編』第一五七卷(二二六六頁)
- (42) 楊周憲修、趙日冕等纂『新建縣志』第三〇卷(『中国方志叢書』本、三三三a-b頁)
- (43) 『全唐文』第八二三卷(八b)
- (44) 『新唐書』第一二六卷(四二三八頁)
- (45) 『唐刺史考全編』第二〇四卷(二七七七頁)、第二七五卷(三二五六頁)、第二九〇卷(三二九五頁)
- (46) 『唐刺史考全編』第七九卷(一一三九頁)。柳田氏はすでに「興化存獎の史伝とその語録」において蔣公は蔣伸のことであると、しかも蒲州に最初に任官した年も考察した。

(47) 李吉甫 『元和郡県図志』、第二二卷(三三三―三二九頁)

(48) 同前注(第八卷、一九八頁)

(49) 呉藩「魏博節度使魏州大都督府長史充魏博觀察処置等使贈太師廬江何公墓志」、周紹良・趙超編『唐代墓誌彙編續集』(上海・上海古籍出版社、二〇〇一年、一〇五七―一〇六〇頁)。柳田氏は何公は何弘敬である可能性があるかと推測したが、確定ではなかった(「興化存奨の史伝とその語録」、六三三頁)。

(50) 柳田氏にはすでにその点を指摘している。「興化存奨の史伝とその語録」(六五―六六頁)、「Historical Introduction」、78

(51) 呉藩「何公墓志」(一〇五九頁)

